

□ 「避難所におけるペットとの共存共生を考える」

動物福祉活動NPO法人与自然と犬の命を繋ぐ会

代表理事 岡本文利

1 はじめに

被災者が避難所に避難する目的は、「家族や地域の仲間と共に生き抜くこと」そこにはペットは必ず一緒なはず。しかし大半の避難所にはペットを否定する環境しか存在していなかった。避難所、そこには管理組織の存在はなく施設のトップと災害担当の自治体職員で地域の住民を受入れ、衣食住の世話や住人からの相談、自治体や行政からの指示に従うことで他に何もできない。「そこには人命が最優先される」という言葉でペットのことは一切相手にされなかったというのが私の体験であった。しかし、ペットを受入れないという事は、その飼主を、被災者として受入れていないことに気づいていないのだろうか。これは大問題だと思います、人権問題になるかもしれません。

2 犬・猫専用の避難所設置まで

そんな中で、熊本地震震源地の益城町、その益城町総合体育館は益城町で最大級の避難所として体育館指定管理者である熊本YMCA(YMCA連合)様が仕切っていた。当該避難所は管理組織が存在する益城町で唯一のまともな避難所であった。そこに集まる専門家(赤十字病院医師団や緊急災害対策研究家の大学教授等々)の間では、1,500名を超える避難所運営の方針として犬猫を追い出さずに災害時だからこそペットの癒し効果で被災者同士が支えあえるとの考えで共有されており、急

いで預り所の建設も提案した。その提案が通った。

但し犬猫預り所が出来るまでの期間だけだったが、私たち犬猫の専門家のサポートで、約一か月間体育館内で、避難者とペットの共存共生が叶った。

当初7～80匹いた避難所での犬猫たちの対応は、震災の恐怖から食欲がまったくないといった相談や車中に犬猫を避難させているが凶暴化する、元気がなくなるといった相談、あるいは動物が苦手である方々からは、犬のマーキングで臭い、吠える声がうるさい、動物の毛が気になるなど避難所内でのクレームが多く寄せられた。これらに対してはスピード対応と飼い主さんへの指導で何とか乗り越えた。

さらに、この間、被災現場では迷子になった犬や猫の捜索や救助する団体、犬猫を預かる団体、総合運動公園内の敷地のテント村で犬猫と飼い主を受入れる団体などが共に出来る支援を行ったことがあの熊本地震183,000人を超える避難者が乗り越えられたのだと思う。

3 益城町『ワンニャンハウス』について

地震発生から1カ月後の5月16日益城町総合体育館(指定避難所)の敷地内に犬猫預り所『益城町ワンニャンハウス』が冷暖房完備の施設で完成した。

この施設は地震と狭い避難所や車中避難でのストレスや四六時中犬猫と一緒にいなければならない

かった環境から避難者を開放させること、犬猫が元気を取り戻すことで飼い主様に元気になって

もらうことなど、犬猫飼主様の復興への支援サポートが目的としたものです。



益城町ワンニャンハウス

そのために、犬猫の専門家が少なくても対応できるようにと造ったドッグラン、熊本の灼熱の日差しと台風対策の為にドッグランに屋根を設置に配慮した。

当該施設は飼主たちのコミュニケーションの場となったのをはじめ、ボランティアで獣医師が開

催してくださった仮設住宅でのペットと暮らす秘訣講習の場として、ドッグトレーナーによるしつけ教室など、多くのイベントが繰り広げられ、平成28年10月31日閉鎖となりました。この間、58匹の犬猫と43家族の避難所生活での共存共生に一役をかけた。



ペットを介したコミュニケーションの場にも

4 おわりに

ペットは、大事な家族の一員です。災害時に対するペットのための備えにも心がけましょう。

○ペットの食べ物等が入った「ペット用防災袋」を用意しておくこと。

○ペットをクレート（犬猫を運搬するためのケース）に入れて一緒に防災訓練（避難訓練）に参加すること。

○保険に加入しておくこと。

○狂犬病ワクチン・混合ワクチンは必ず接種すること。